

西田幾多郎の場所論と宗教的癒し

荒木, 正見
文京学院大学人間学部 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/7341514>

出版情報 : Journal of comparative philosophy. (15), pp.1-7, 2008-09-30. Fukuoka Association for Comparative Philosophy

バージョン :

権利関係 :

西田幾多郎の場所論と宗教的癒し

荒木 正見

小論は、西田幾多郎の絶筆とされる「場所的論理と宗教的世界観」(執筆昭和 20 年・刊行昭和 21 年)、「場所」(大正 15 年)および「私と汝」(昭和 7 年)等に基づき、場所論と場所概念の構造的再検討を行い、そこから導かれる西田幾多郎における宗教的癒しの意味について考察するものである。とくに、「場所的論理と宗教的世界観」での考察はカントとの比較を多用しているので、特に構造的な考察においては小論でもカントとの比較を意識して遂行する。

なお、テキストは、『西田幾多郎全集 第十一巻』(岩波書店、1949 年/1988 年、371～464 頁)、『西田幾多郎全集 第四巻』(岩波書店、1949 年/1988 年、208～289 頁)および『西田幾多郎全集 第六巻』(岩波書店、1948 年/1988 年、341～427 頁)を用い、さらにそれぞれ、上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅲ』(岩波書店、岩波文庫、1989 年/1994 年)、上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』(岩波書店、岩波文庫、1987 年/1994 年)、を参考にする。引用において、旧漢字、旧仮名遣いは現代のものに直す。また外国語文献の引用は拙訳を用いる。

1. 西田幾多郎における宗教

「場所的論理と宗教的世界観」(『西田幾多郎全集 第十一巻』、上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅲ』)において、西田幾多郎はその趣旨を、「宗教は心霊上の事実」「哲学者はこの心霊上の事実を説明せなければならない」(全集第十一巻、371 頁)と、心的な事実としての宗教を説明することにあるとする。

そこでまず宗教心が説明されるが、「神が宗教の根本概念」(全集第十一巻、372 頁)とされるその神は「我々の自己に心霊上の事実として現れる」(全集第十一巻、372 頁)と述べられるが、それは知的な理解の対象ではないことを意味している。

ここで批判的に考察されるのがカントである。宗教については、「唯道德的意識の上から宗教を見ていた」「カントにおいては、宗教は道德の補助的機関として、その意義を有する」「カントにおいて、宗教的意識そのものの独自性を見いだすことはできない。」(全集第十一巻、373 頁)などと述べられている。

この点に関して、カント「道德形而上学原論」(1785, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Kants Werke IV, Walter Gruyter & Co., 1968)では、「この考察された(注: 意志の)自律の原理こそが道德の最高の原理」(S.440)とされるように、「意志の自律(Die Autonomie des Willens)」を道德の基礎に置かれている。これに対して「意志の他律(Die Heteronomie des Willens)」すなわち「意志が自分自身から出て、何か或る自分の客体(Objekt=対象)の性質に、これ(自分自身を規定する法則)を求めようとする」(S.441)ことは、当然ながら批判的に捉えられているが、このような他律の原理に基づくものとして以下の四例が挙げられている(S.441-442)。

まず、経験的な(empirisch)原理と、合理的(rational)な原理とに分けられるが、前者は幸福(Glückseligkeit)の原理に基づき、自然的感情から、もしくは、道德的感情から生じるとされる。後者は、完全性(Vollkommenheit)の原理に基づき、可能性の結果としての完全

性という理性概念から、もしくは、我々の意志を決定する原因としての独立した完全性（神の意志 = Willen Gottes）から生じるとされる。

「道徳形而上学原論」ではこれらのすべてが他律の原理に基づくものとして退けられるが、それは周知のように、ひとつには、カント思想の傾向性として、個人の理性に裏づけされた自由が至上の前提であるということを挙げなければならないし、また、いまひとつには、その理性を保証するものとして、各個人に共通の、認識や行動のアプリオリな形式が横たわっていることを指摘しなければならない。

さらにカントは、「道徳哲学」（1797, *Metaphysik der Sitten*, Kants Werke VI, Walter Gruyter & Co., 1968）において、「宗教論は倫理学の一部と見做されるべきか」「もしくは全く純粹哲学的な道徳学の限界の外に存在すると考えられなければならないのか」（S.487）と問いかけ、以下のように論を展開する。

初めに宗教を、「神の命令としてのあらゆる義務の総体 Inbegriff aller Pflichten als(instar) göttlicher Gebote」（S.487）と規定する。この場合には、「すべての宗教の形式面は哲学的道徳学に属している」（S.487）とする。この「形式面」とは、「神の命令としての義務と一つの神的、先天的に a priori 与えられた意志との関係」（S.487）とされている。

すなわち、この構造は次のように解される。「我々は、一人の他者及びその意志（普遍的に立法的な理性は、ただ単にこの意志の発言者でしかない）即ち神を考えることなく、義務 Verpflichtung（道徳的強制 moralische Nöthigung）を十分に明確にはできない。」（S.487）とされるように、とりあえずは、「神の命令としての義務」は、当然、我々を超越した神の発言を受け止めたもののはずである。

しかしカントは続いて、「但しこのような神（本来、我々がこのような存在に関して作る理念 Idee）における義務は自己自身に関する人間の義務である」（S.487）と、「神の命令」も我々の意識内の出来事だと述べるのである。そこで、神の命令に応じてある種の奉仕を成すべき責任というのは実は「客観的義務ではなく、単に我々自身の立法的理性の内部の道徳的動機を強くするための責任、すなわち主観的義務」（S.487）と、すべてが我々の主観内で展開することという立場を明らかにする。

次にカントは、宗教の実質的な点、「神に対する義務の総体、すなわち神に対して行うべき奉仕」（S.487）について考察する。カントに拠ればそのような奉仕においては「宗教は普遍的に立法的な理性からのみ生じるのではない、それ故我々においては先天的にではなく、単に経験的に認識可能な、従ってただ我々に啓示された宗教にのみ属する義務を神的命令として含む可能性がある」（S.487）、すなわち、「神に対して行うべき奉仕」には、われわれの経験に関する内容を含むとするのである。

このように、いずれの考察も「宗教は神に対する義務論として、純粹哲学的な倫理学のあらゆる限界の彼方に超えて存在する」（S.487）とされるように、カントにとって宗教は道徳を超越するものとして、道徳に直接関わるものではない。そして少なくともカントにとって立つべき主な課題は我々の意識の側にある道徳であることはいうまでもない。

さて、このようなカントの考え方に対して、「場所的論理と宗教的世界観」では上記のように批判される。

たしかに、カントが、上記のように神を分類し、知的に、また、批判的に位置づける限り、また、意識の領域の外に神を置き、宗教とはそのような神との関係であるから、厳密には直接関わることはできないとする以上、西田幾多郎の指摘はふさわしいように見える。しかし、それでは、西田幾多郎が、自分なりに神もしくは絶対者、超越的存在をどのように理解しようとしているのか、が問題になる。

2. 絶対矛盾的自己同一の世界

西田幾多郎がカントを批判する要点は、それが「対象論理」に基づくものだという点にある。それは、カント自身が、神を道德の原理とすることは他律の原理であるとして退けるのと、立場は異なるとしても、構造的には一致する。すなわち、カントは本来、神を他律的に捉えているので、自らが自由に生きるための本来の原理とは出来なかったと言い換えることができる。

他方、西田幾多郎も宗教心もしくは神という心的事実を説明しなければならない。説明とは一步間違えれば、対象論理に陥る方向性を持つ。そのようにならないためには、認識と存在の構造が鍵になる。このような原理的考察の手がかりになる概念として提起されるのが「矛盾的自己同一」である。

前以て 小論の結論に至る展開を述べれば、この「矛盾的自己同一」が、「場所論」の存在構造から生じるものであり、その構造上における心的事実として神、絶対者、超越的存在が生じるということになる筈である。

「矛盾的自己同一」は、西田幾多郎の著作の各所にさまざまな表現で示されるが、ここでは、次のように展開される。

まず「我々の自己は働くもの」（全集第十一巻、374 頁）とされ、「働くもの」はすぐに「我々の自己」において論じられるのではなく、「物と物との相互関係」（全集第十一巻、374 頁）において考察される。

「働くというには、先ず一が他を否定し、他が一を否定する、相互否定関係というものがなければならない」（全集第十一巻、374 頁）とされるが、すなわち、「働く」ということは、まず、一が他に働きかけることによって、一が他を自分と区別することである。このことは、同時に、他が一と区別されることでもある。しかし、また「働く」ということは、「相互否定が即相互肯定ということではなければならない」（全集第十一巻、374 頁）と述べられるように、相手の存在を認めていることでもある。そして同時に「二者共に何処までも独自性を有し、相互に相対立し、相互に相否定することが、相互に相結合し、一つの形を形作ることであり、逆に相互に相関係する、相結合し、一つの形を形作ること」とその事が、何処までも相互に相対立し、相否定することではなければならない、即ち物が各自に独自のになる、物が物自身となるということではなければならない。（全集第十一巻、374 頁）と述べられるように、「働くこと」によって生じる新たな結合的事態が、むしろ、それぞれの独自の存在を認めることになると述べられる。これは、「此（かく）の如き方式によって、我々は物と物との相働く世界、物質的世界というものを考えている」（全集第十一巻、374 頁）と述べられるように、我々が一般に考える物質的世界における諸物質のあり方に対する認識である。そして、このような物の世界にも、「矛盾的自己同一の論理」（全集第十一巻、374 頁）があるとされる。

このように、「矛盾的自己同一」は、すべての事柄における一般的な事態であるとされるが、西田幾多郎に関する一般的な理解として、「何でもものには矛盾的側面がある」といった表面的理解をしてはならないことはいうまでもない。上記の考察からも示唆されるように、それは、存在論的、認識論的背景を確固たるものとするところにはじめて存在することである。小論の考察の焦点は徐々にそのことへと絞られる。

他方、「働くこと」は、「真に働くものというものは、単に他によって動かされるもの、即ち働かれるものではなくして、自己によって他を動かすもの、自己から働くものでなければならない。」（全集第十一巻、374 頁）と述べられるように、上記、物の世界の説明ではまだ不完全である。

このように「自己から働くもの」は、「秩序」、もしくは「順序」を持ち、非可逆的な「時」

を持つものだとされる（全集第十一巻、375 頁）。すなわち、能動的に行為する以上、単に相対的に行為するのではなく、常に目的を指向した行為の順序が存在するし、それは、時の流れに刻み込まれていくものだとされるのである。

そして、このような「自己から働くもの」は、「生命」を持つものである。

「生命」に関しては、場所論的構造や、神概念と密接な関係があり、また、「矛盾的自己同一」の現れとして、次のように述べられる。

すなわち、「生命の世界」というのは、物質の世界と異なり、自己自身の中に自己表現を含み、自己の内に自己を映すことによって、内と外との整合的に、作られたものから作るものへと働き行く世界」「自己自身によって有り、自己自身によって動く世界」（全集第十一巻、375 頁）とされるように、「生命」は「生命の世界」を構成し動かすものであるが、その「生命の世界」は、「自己表現」し、能動的に作りゆく世界である。ところで、この引用の「自己」は、生命を持って動くものなので、「世界」と「世界の中に存在する個別の存在」との両方を指すものだといえる。

さらにこの「生命の世界」は、「矛盾的自己同一的世界」でもある。「矛盾的自己同一的世界は、自己の中に自己焦点を含み、動的焦点を中軸として、無限に自己自身を限定していく」（全集第十一巻、375 頁）と述べられるが、それはそのまま、「生命の世界」の構造と一致する。すなわち「矛盾的自己同一的世界」が無限に自己限定を繰り返し、そのことは全体としての自己の否定でありながら同時に全体としての自己表現でもあるという矛盾的運動こそが、生命によるものだといえるのである。

その全体としての運動はまさに全体の自己による能動的行為であるから、すべての変化は、「それが世界の自己形成へとして、方向を有っていなければならない。働きは、すべて方向を有っていなければならない。」（全集第十一巻、375 頁）とされるように、全体の目的に沿ったものだといえるのである。

ここから、我々自身についても、「我々の自己は、絶対矛盾的自己同一的な歴史的世界の唯一なる個として、単に目的的に働くというのではなく、目的を知って働くものである。自覚的であるのである。」（全集第十一巻、376 頁）と、全体の目的を知って自覚的に働くものだという指摘が生じることになる。このことは「我々の自己が意識的に働くというのは、我々の自己が世界の一表現点として、世界を自己に表現することによって世界を形成すること」（全集第十一巻、377 頁）と述べられるように、個的な我々自身が全体としての世界の自己限定であるとともに、我々自身の働きが世界を形成しているという構造と重なることによって理解できる。

このような全体と個の、絶対矛盾的自己同一的關係と、運動の源としての生命と、そして、全体と個との目的の問題によって、対象論理を超える構造が示されたといえる。それは最も根本的な、西田幾多郎の存在構造、すなわち場所論の構造に基づくものであるので、まずそれを確認して、対象論理を超える構造であることを整理する。

3. 場所論

「場所」（『西田幾多郎全集 第四巻』、『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』）において、「場所」とは、「対象と対象とが互に相関係し、一体系を成して、自己自身を維持するというには、かかる体系自身を維持するものが考えられねばならぬと共に、かかる体系をその中に成立せしめ、かかる体系がそれに於てあるというべきものが考えられねばならぬ」（全集第四巻、208 頁）と述べられる「体系自身を維持するもの」であり、「論理的には関係の項と関係自身とを区別することができ、関係を統一するものと関係が於てあるものとを区別すること

もできる」(全集第四巻、208 頁)と述べられる「関係自身」や「関係が於てあるもの」であり、「我と非我との対立を内に包み、いわゆる意識現象を内に成立せしめるもの」(全集第四巻、208～209 頁)であるものを、プラトンのティマイオスの語に倣ってそのように名づけるとされる。すなわち「場所」とは、唯一、無限、絶対の存在そのもの、最も一般的なものを意味するといえる。

従って、「意識は一般的なるものの自己限定」(全集第四巻、211 頁)と、意味によって代表されるようなあらゆる一般的なものの自己限定が意識であると述べるその究極に、「場所」という最も一般的なものを想定すれば、すべての個は、「場所」の自己限定によって生じるといえる。

さらに先に「矛盾的自己同一的世界」が無限に自己限定を繰り返し、そのことは全体としての自己の否定でありながら同時に全体としての自己表現でもあると述べたように、「場所」はまさに、この「矛盾的自己同一的世界」であるのだから、個は「場所」に対して、自己表現という限定を行う。

この、個と「場所」との相互限定の運動は、ダイナミズムの方向としては逆方向ではあるが、その相互限定によってこそ、個は個としての同一性と、個々の存在としての同一性を有し、「場所」は場所としての同一性を持つ事になる。

さらに、「私と汝」(『西田幾多郎全集 第六巻』、『西田幾多郎哲学論集 I』)で、「我々は歴史的一般者の自己限定として限定せられる」(全集第六巻、416 頁)とされるように、この運動は歴史として捉えられる。そして、相互限定は、今、私と汝の関係を例に挙げて、「私と汝は唯歴史において相逢うのである。而してそれは逆に私と汝が相逢うことによって、歴史が成立することを意味している」(全集第六巻、419 頁)とされるように、「場所」と個とは、歴史的に相互限定するのである。すなわち、具体的な歴史は、「場所」と個との相互限定の軌跡であるともいえる。

さて、場所論のこのような構造は、カント流の対象論理を超えて、主客統合的な論理の典型を示すものだといえる。

すなわち、このような場所論の構造について、高山岩男『西田哲学とは何か』(一燈園 燈影会、昭和 63 年)で、「場所とは個体のおいてある場」「個と場とは原理上双関的」(『西田哲学とは何か』57 頁)と述べられるように、すべての個は、「場所」の自己限定によって成立したものであり、意識もまた同様であるので、一見対象性を持つように見えても、その存在根拠は「場所」という一般者にあることになる。

それは、竹内良知『西田哲学の行為的直観』(農文協、1992 年/2002 年)で、「個物は一般者によって限定されるのでなければ、知られることができない。しかし、単に他によって限定されるものは個物ではない。個物は自己自身を限定するものである。そうでなければ個物は独立性をもつことができない。個物は逆に一般者を限定するものでなければならない。」(『西田哲学の行為的直観』39 頁)と述べられるように、「矛盾的自己同一的世界」性において存在しているからこそ、対象性と非対象性が、むしろ個と全体の同一性を維持するという積極的な意味で、両立しうるのである。

4. 場所と宗教と癒し

ところで、以上の構造が構造として、心的、宗教的事実に反映するのは、知的場面ではないことは明らかである。知的場面の対象性は、構造の一部を切り取ったにすぎないからである。

では、我々の意識が対象性を持たない場面とはどのような場面であろうか。当面それは

認識不能な「無」として表われる。それを我々は「神」と名づける。当然のことながらそれは、全てを意味する全体である。しかしまたそれは、『西田哲学とは何か』でも「真の一般者と考えられるものは有でなきもの即ち無でなければならぬ」「絶対無は有を包み有を限定するものでなければならぬ」(『西田哲学とは何か』109頁)と述べられるように、まさに「場所」と名づけなければならなかったように、また場所論の考察でも言及したように、無限、すなわち、すべての区別を持たないものであり、自己限定することではじめて何らかの有を生じるものであり、それ自体何らかの有ではない。

この考察の上に、「神は何処までも自己否定的にこの世界においてある」(全集第十一巻、398頁)と述べられ、また、「神は何処までも内在的」「神は、この世界において、何処にもないとともに何処にもあらざる所なし」(全集第十一巻、398頁)また、「仏にあらざる故に仏である、衆生衆生にあらざる故に衆生である」(全集第十一巻、398頁)などと述べられることになる。

いうまでもなく徹頭徹尾対象論理を廃した結果到達したこのような絶対者観は、ひとつの極である。

例えば「創造作用」についても、「多と一との矛盾的自己同一的世界が、自己自身の中に自己を表現し、何処までも無基底的に、作られたものから作るものへと、無限に自己自身を形成しゆく」(全集第十一巻、400頁)とされるが、この無限性は個としての我々の側から、無限の可能性を意味することにほかならない。神の啓示にしても「矛盾的自己同一の世界が自己の中に自己を表現し、自己自身を表現することによって自己自身を形成して行く。かかる絶対者の自己表現が、宗教的に神の啓示と考えられる」(全集第十一巻、403頁)と述べられるように、何か定まった原理を提供するのではなく無限の運動を意味している。いうまでもなく、それは、我々の発展的運動でもあり、我々の無限な可能性を意味している。「主語的超越的に君主的 Dominus なる神は創造神ではない。」(全集第十一巻、400頁)とされるように、このような無限的無基底的な神は無限に創造する故に、我々の可能性を無限に保証するものである。これは絶対的な救いであり、癒しである。

もちろん、西田幾多郎において救いや癒しにおいて救われるものは自己ではあるが、日常的な理解では語れない。「場所的論理と宗教的世界観」では宗教的問題とは「我々の自己とは何であるか、それは何処にあるのであるか、自己そのものの本体の問題、その在処の問題」(全集第十一巻、412頁)とされるように、我々の存在そのものに対する問いである。それは究極の問いである。これまでの考察ではその構造的な解答が得られたと同時に、癒しの手がかりが得られたといえる。

それは我々自身が、個として無限の可能性を有するということであり、絶対的な存在そのものでもあるという安堵感でもある。

しかし、冒頭でも述べたように、この考え方にも説明や理解である限り対象論理が忍び寄る可能性を無視するわけにはいかない。

それについての一つの解答として、「場所的論理と宗教的世界観」では、「自然法爾(じねんほうに)」が挙げられている。

これは一般的に自然に振舞うというのではない。「宗教的体験は対象論理的に考えられるものではない。それは何処までも絶対悲願に包まれるということではなければならない。」(全集第十一巻、444頁)と、阿弥陀如来の絶対的救いに身をゆだねることを例示して、自ずから然りという境地に達することが述べられる。そして、「真理は我々が物となって考え、物となって見る所にある」(全集第十一巻、444頁)、また、「慈悲とは、我々の自己が、徹底的にかかる立場に立つこと」(全集第十一巻、444頁)と、我々が自我を捨てることが述べられている。それは、これまで述べられた構造から言えば我々の自己が「絶対者の自己否定的肯定として働くこと」(全集第十一巻、444頁)とされている。すなわち、自我を捨

てることによって自己の同一性を得ること、これもまたひとつの癒しである。

西田幾多郎は宗教を生涯の主要なテーマとしただけに、宗教的癒しに関する示唆に富んだ考察は多い。この論文ではそれらが生じてくる根底的構造について論じた。今後は、それら示唆に富んだ考察を、この構造と比較しつつ、吟味、検討していくことが課題である。

直接引用、参照した文献

西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」執筆昭和 20 年・刊行昭和 21 年。

(『西田幾多郎全集 第十一卷』岩波書店、1949 年／1988 年、371～464 頁)

(上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅲ』岩波書店、岩波文庫、1989 年／1994 年、299～397 頁)

西田幾多郎「場所」大正 15 年。

(『西田幾多郎全集 第四卷』岩波書店、1949 年／1988 年、208～289 頁)

(上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』岩波書店、岩波文庫、1987 年／1994 年)

西田幾多郎「私と汝」昭和 7 年。

(『西田幾多郎全集 第六卷』岩波書店、1948 年／1988 年、341～427 頁)

(上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』(岩波書店、岩波文庫、1987 年／1994 年)

I. カント「道徳形而上学原論」1785 年。

(Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Kants Werke IV, Walter Gruyter & Co., 1968)

I. カント「道徳哲学」1797 年。

(Metaphysik der Sitten, Kants Werke VI, Walter Gruyter & Co., 1968)

高山岩男『西田哲学とは何か』一燈園 燈影会、昭和 63 年。

竹内良知『西田哲学の行為的直観』農文協、1992 年／2002 年。

[Study of Religious Healing referring to NISHIDA, Kitaro's Topos Theory]

[ARAKI Masami・文京学院大学人間学部教授・哲学・比較思想]